

# 古庭園の植栽に関する研究 (3)

—播磨瑞光寺庭園を中心として—

藪 内 捷 之

## はじめに

古庭園の植栽について、自然植生ではない庭園植栽すなわち、鑑賞用という cultivated plant の利用、そして庭園植栽での実用性を、瑞光寺庭園の事例で第3報にまとめる。

瑞光寺は、中国山脈の麓にあり、平野の中にお碗をかぶせたような山々が連なる播州独特の風景の中に建っており、禅宗の古刹である。<sup>(注1)</sup>

寺伝によれば夢窓国師が開祖であるとし、その後兵火による浮沈を何度かくぐり抜け、1686(貞享3)年に文礼周郁<sup>(注2)</sup>により再興されたが、1732(享保17)年10月に再び火災に会い焼失している。その後、1735(享保20)年には楡越が池田太郎兵衛、住職が周芸和尚の時、再建され、池田太郎兵衛は財力もあり、文化面にも深い関心があった。寺の庭園については一切不明であるが、もしこの人物が寄進造営したとすれば、享保から次の元文年間(1716~1740年)に作庭したと推定できる。

この実測調査を昭和50年12月末の冬休みを利用して行った。この庭は、庭園構成についてのみならず、植栽についても注目すべき点があるので、これを調査したい。この研究に当たり、豊富な庭園史学の知識の一端を示して下さった西桂氏(兵庫県立農業高等学校勤務)、実測に参画していただいた兵庫県立農業高等学校造園科3学年松岡宏明、長石隆弘、森田栄一の皆さんには心からの感謝の意を表します。

## 1. 庭園構成について

山畔式の庭園で、建物の北側に山裾沿いに約45mにわたって庭園が続く。これは西の池庭、東の枯山水式庭園からなっている。池庭では、まず護岸石組、滝石組、岩島(石だけで組みあげた島)が目目されよう。護岸石組は、山腹の二段ないし三段の石組と一体をなし、直径40cm(0.17トン級)の岩石によって、リズム感を出している。滝石組では、添石として変化に富んだ巨石を、水落石として加工石をそれぞれ使用している。<sup>(注3)</sup>

また、対岸から池へ突き出した「半掛かりの石橋」<sup>(注4)</sup>がある。これは、植治の活躍した江戸末期から明治時代にかけて流行した手法である。淡路・沼島の旧大寺伊藤邸

庭園、京都・南禅寺の光雲寺庭園などにその例を見る。遠山石は、前のお化灯笼や荒木に隠れて見えにくくなっているが、高さ140cmの立石を初め、三石で組まれている。

枯山水では、石が低く据えられ、ゆったりした感じを受ける。

## 2. 庭園における植物の配植

園内の樹木は次のようにまとめられる。これは特に、高さ1m以上( $h > 1m$ )の高木について要約したものである。

この庭園の植栽の特徴は、モミジを中心として、大木が上空を閉鎖していることである。その高木樹冠線(スカイライン)の下で、陰影空間が構成され、石組を初めとする庭園材料が最も美しく観賞される条件を作り出している。イロハモミジの大木群が落葉広葉樹で、晩秋から冬にかけて枯枝を見せ、地表にまで光線を落とさせ、これが理想的な日照調節の役目果たしていることも忘れてはならない。

中木には、サカキ、イヌマキ、サザンカ、スギ、ヒノキ、シキミ、モッコクなど、いわゆる陰樹類が主に入っている。これは、モミジ(落葉広葉樹類)アカマツ(針葉樹・陽樹類)など、樹高・枝幅共10~12m級の巨木の樹冠下でも生育できることを意味する。

さらに地表面には、ウマスギゴケを初めとする苔類の他に、ヒラドツツジ、サツキ、コクチナシなど半日陰地に耐える低木が配植されている。このように苔類が繁茂している理由は、池や排水路があるように水が豊富なこと、山腹の傾斜面と建物の間で凹地という微気候を形成していることがあげられよう。池の護岸法面は高さ3mにわたり延びており、同じく枯山水の山裾の勾配は60%で、やや急斜面が高さ2.5mにわたって続く、庭園において、山際から建物下までの幅はせいぜい6m足らずである。

### (1) 池庭の配植

モミジとアカマツが高木樹冠群を形成しているが、日射はかなり透過する。池の汀をとり囲むようにして、モッコク、イヌマキなどが、観賞木として中木層を作って

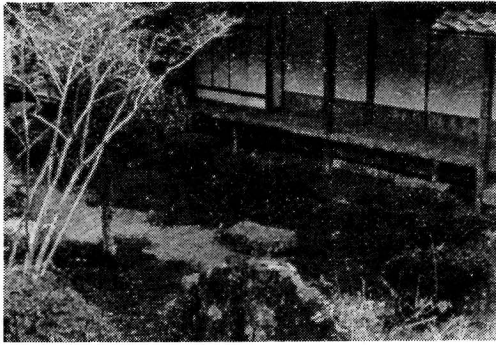


Photo 1 Whole view of the dry stone garden in Zuikoji Temple.



Photo 2 Rock works of the pond garden in the same temple.

いる。また、サツキ、ヒラドツツジ、コクチナシなどが石間で根締め働きをし、低木による地被植物として極めて多数用いられている。以上三層の下にあって、ウマスギゴケを中心とした苔類が、この庭園内を覆っている。低木類がやや繁植し過ぎて、石組の造形的な美しさが、損なわれているきらいがある。

上部空間が各樹木の枝葉層に占められており、また地形の低地に庭があるため、ここは暗い庭園であるといえる。この遮光性によって、この空間に雑草が生えるのを防いでいる。

(2) 枯山水庭園の配植

建物の北側沿いに、低刈込みのコクチナシ、サツキの他、クロチク、マンリョウの植込みが、観賞のため、この庭の縁取りとして利用されている。庭園内を回遊する

よりも、縁（板間）より眺めるような配植がなされている。石組のコンビネーションとしてモッコク、イヌマキ、クロマツという観賞木を配し、根締めにはコクチナシ、サツキ、ハイバクシンという寄植えを備えている。もしも、この植栽に図案効果があるとすれば、群植の区画性によって意義があるのである。この敷地も青々とした苔がむしている。

対面している急斜面には、サツキ、ヒラドツツジ、コクチナシ、ツゲ、ハイバクシンなどの他雑木低木がびっしり生えており、さらに上段にはモミジ、ユズリハなど中高木が、そこに覆いかぶさるように植えられている。下段から1.6~1m高い法面に90cm（幅）×140cm（長さ）の景石が、見上げて眺められるはずであるが、実際は茂みの中に隠れてしまっていることができない。

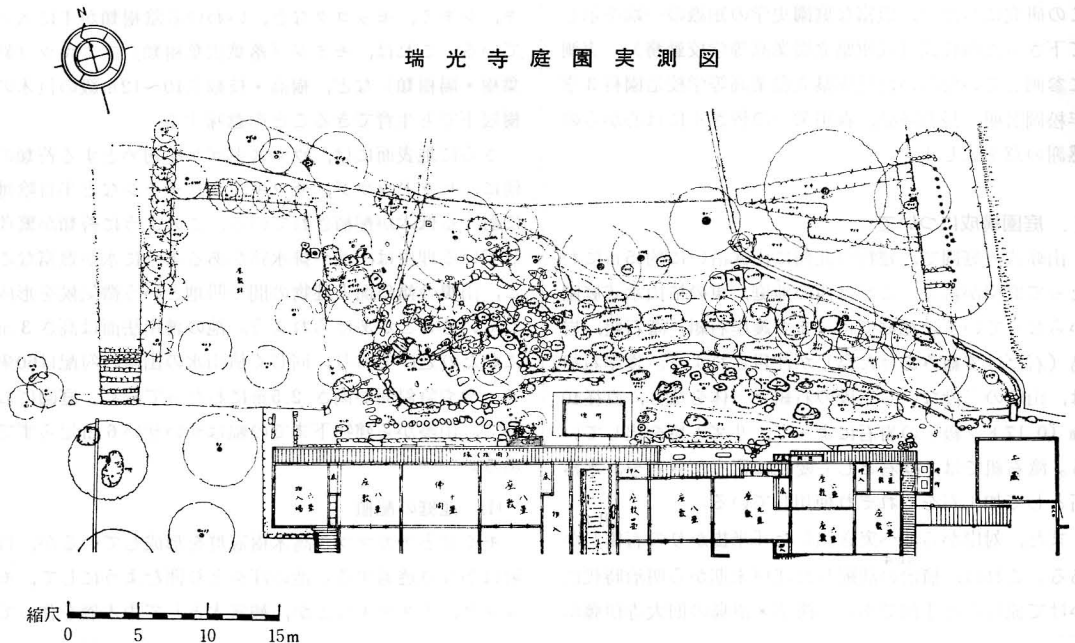


Fig. 1 The Survey Map of Zuikoji Temple Garden.

### (3) その他の配植

伽藍の間に見られる木はいづれも大木である。タラヨウ、ウメ、モッコク、クスノキ、モミジ、モミ、クロマツは空高く亭々とそびえている。

庭の斜面、下段から2m以上の高さでは、列植・帯植といった整形形式（人工）植栽が見られる。その樹種はマキ、サツキ、スギ、カエデである。この植栽は個々の木を觀賞するよりも、背景樹林すなわちセットバックとして、群植による迫力を出している。

### 3. 調査による結果および考察

理想の庭園植栽について、ここで考える。低木がやや多過ぎるため、もっとよく石組の輪郭が見えるように、これを整理する必要がある。一般に、庭園管理上、整枝・剪定が重要で、年間、夏と冬の二回にわたり、この手入れを行なう。良し悪しは別にして、自然植栽でなく、人工植栽であるということは、できるだけ永く同じ形を保つことを意味する。一時的には景観が変わる程、刈込みを行いながら、なおかつ、庭園樹木が同じ姿であることは自然放置によっては望めないことである。

庭園内の植物は、実用方面のみならず鑑賞方面から、考察されるべきである。この鑑賞といえば、主観も入るので、以下私見も交えて論じることにする。

まず、枯山水庭園においては、

- (1) 建物側の低刈込みデザインを主とする。
- (2) 景石を隠している中低木を除去する。
- (3) 後方斜面の植物を低く刈り込む。

以上のことが管理に際して大切と思われる。

同様にして、池庭について、もっと植栽改善をするための意見を述べると、次のようになる。

- (1) モミジの大木が多過ぎる。やや間伐の要がある。
- (2) 不要な低木や生長し過ぎた低木がある。除去および整理をする。
- (3) 岩島の植栽をすべて伐り払い、石組だけを見せるようにする。

ただし、この庭で見せている植物の実用的な側面は、これを十分尊重しなければならない。例えば、高木層は雑草の防除のためには不可欠であり、護岸の植栽は岩くずれしないための土留めである。

イロハモミジが樹林層を高樹冠で形成しているのは、人為的に植えたものにしろ、自然植生から適地となっているためであろう。関東平野の事例で、イロハモミジヶヤキ林が、土壌の湿潤な渓谷周辺、海拔700~800m以下において自生していることは、この樹種の性質を暗示しているようである。

もしも、このような樹林形を維持しようとする場合、

モミジ林はどのような更新が可能であろうか。この山畔地のように空間が狭いと、陽樹といわれる種類は雑樹からは育ちにくくなる。陽生に属するモミジの高木層を三段植栽を保ったまま継続しようとするれば、サクセッション（植物遷移）の原則からいって、その生え代りには十分な人為的工夫を要するであろう。例えば、かなりの面積にわたり大木を伐開した後、若木を移植することが考えられよう。

以上、当庭園の配植について論じて来たが、古庭園での植物は実態記録でしかなく、築庭当初の植栽技術を批判する上での資料としては無理がある。すなわち、過去へさかのぼって植栽の歴史を明らかにするのではなく、むしろ、今に伝わるものの中で現代とのかかわりを追究せねばならない。当時の施主や族工者が何年か先の植物の形姿を頭にえがいていたのと同様に、実用性および鑑賞性という総合された目標のどこに重点を置くかが、現在の吾々にとっては課題である。そして、この植物は、大自然の営みと人間の生活環境との接点に設けられた庭園という場に植栽されていることが大切であるといえよう。

### まとめ

瑞光寺庭園は池庭と枯山水庭園とからなり、その植栽は立面的に三段を形成している。景石や護岸石組を高く覆うように、モミジが高木として、鑑賞的にも実用的にも主体となっており、次の諸点を明らかにした。(Fig. 2 参照)

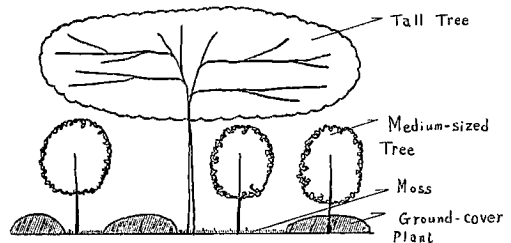


Fig. 2 Schema of triplex planting.

1. モミジ林が庭全体に拡がり、ほの暗い空間を構成している。石組を初めとする点景を、最も美しく觀賞させる条件を作り出している。(Table 1 参照)
2. 中木（サカキ、サザンカ、イヌマキ、モッコクなど）は、一般に陰樹でありながら、觀賞木が主流をめている。
3. 低木は傾斜面と枯山水庭園によく繁茂しているが、ややしげり過ぎである。デザイン的に考え、整理の要がある。
4. ウマシゴケをはじめ苔類は、池と水路のため、土壌水分や空中湿度が高くなり、敷地一面おおっている。

Table 1 The Diagram of Planting Trees  
高木植栽一覽表 (above height 1m)

樹木名	規格・寸法			数量
	樹高	枝幅	胸高直徑	
	cm	cm	cm	本
カエデ	1200	1200	54	1
〃	1000	1000	50	3
〃	1000	500		9
〃	800	700	20	1
〃	700	600	10	1
〃	700	600		9
〃	600	500	m 幹 10×3	1
〃	200	200		3
アカマツ	1000	1000		1
モッコク	1000	1000		1
〃	200	200		2
〃	120	150		1
〃	500	300		3
モクレン	700	500		1
スギ	700	600		2
ヒノキ	700	600		2
サクラ	700	500		3
シキミ	700	600		1
サザンカ	700	500		2
ギンモクセイ	700	500		1
ユズリハ	600	400	10	2
サカキ	500	400	10	1
イヌマキ	500	300		9
〃	200	—	—	1
〃	200	200		2
クロマツ	300	200		1
ウメ	200	200		1

注釈

- (注1) 国師当時に十境というのが定められていたことが本寺院に伝わっている。十境では「天竜寺の十境」が有名であり、これになぞらえたものであろうか。それは、大治軒、吉祥水、琵琶泉、崑崙岩、普門堂、閑月橋、省心楼、瑞応庵、坐禅石、棲龍池である。
- (注2) 同じく十境が、改めて1864(貞享元)年10月15日 文礼周郁の手写の軸による「瑞光寺十境叙并詩」に伝わっている。
- いわく、甘露井、普門台、護法嶺、神龍溪、妙音殿、明顯峰、崑崙岩、観月亭、坐禅石、聯芳塔。
- (注3) この石を護岸の景石または出島であるとする見方もあるが、筆者はこれを沢飛石または石橋の一部と見たい。
- (注4) 造園家・小川治兵衛のこと。京都の無隣庵と椿山荘の庭園が代表作で、明治期から昭和初めにかけて活躍した。

Summary

The planting of the *Zuikoi Temple*, which is famous for its ancient style pond-garden and dry water garden as well in Yedo Period, constitutes vertically a triple stratum. (cf. Fig. 2)

The tall maple trees (*Acer palmatum* Thunb) chiefly play a very important part in the garden, from both ornamental and practical point of view, covering high over the garden stones and the rock combinations around the bank.

The writer observed and surveyed carefully the gardens as well as its plants, and gained Fig. 1 for the purpose of studying the fundamental problems of planting designs

The obtained results are as follows:

1. The maple woods spread over the whole garden and form a little dark space. At the same time, they produce the conditions which enable us to appreciate the rock combinations and the garden accessories most beautiful (cf. Table 1)
2. The medium-sized trees, such as Japanese Cleyera, Camellia Sasanqua, Podocarpe, Japanese Ternstroemia, etc., which grew generally even in the shade, are mainly planted as the ornamental ones.
3. The shrubs grow thick on the slope and in the dry water garden, but they grow a little too much densely. Judging from the point of design, they should be cut in better shape.
4. The moss like hair moss (*Polytrichum commune* L.) becomes high water in soil and humidity in air on account of the pond or the waterway, and grows densely all over the site.